

殺戮のオルガ 鉄血の絆

如月 刹那

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄華団団長であるオルガ・イツカは、ヒットマンの奇襲で団員であるライドを庇い死亡した――。

しかし、眼が覚めるとそこは見知らぬ場所。そこで出会った記憶喪失の少女「レイチエル・ガードナー」と昔からの相棒「三日月・オーガス」と共に見知らぬ施設からの脱出を目指す。

だが、その道中、狂気的な笑いと共に鎌を振り回す殺人鬼「ザック」と出会い、流れは大きく変わっていく――。

異世界オルガシリーズである

『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』×『殺戮の天使』のクロスオーバーとなっている『殺戮のオルガ』をノベライズ！

ニコニコ動画にて投稿されている『殺戮のオルガ』のノベライズとなっております。製作者様であるバラタース様には制作の許可を頂いて、投稿させて頂いています。

既に先駆者様がいらっしやる為、そちらと差別化させていただく為に描写や改変が多めになってしまうことも伝えてあります。

他に参考文献として原作ゲーム、小説版、アニメ版、公式ファンブックを使用しておりますので、ネタバレにはご注意ください。

『殺戮のオルガ』 動画第一話リンク

s
m
3
3
5
6
8
5
5
3
h
t
t
p
s
:
/
s
p
.
n
i
c
o
v
i
d
e
o
.
j
p
/
w
a
t
c
h
/
/

目次

プロローグ	1
第一話	4
第二話	13

プロローグ

アドモス商会の廊下を歩く2人——鉄華団の団長であるオルガと団員であるライドは迎えの車へと向かいながら会話をしていた。

「なんか静かですね。街の中にはギャラルホルンもないし本部とはえらい違いだ」

「ああ、火星の戦力は軒並み向こうに回してんのかもな」

「まあ、そんなのもう関係ないですけどね！」

「上機嫌だな」

「そりやそうですよ！みんな助かるし、タカキも頑張ってたし、俺も頑張らないと！」

「ああ」

（そうだ。俺たちが今まで積み上げてきたもんは、全部無駄じゃなかった。これからも俺たちが立ち止まらないかぎり道は続く）

——そんな想いを抱くオルガに避けられない運命が迫っていた。

2人がアドモス商会を出た途端に車のブレーキ音が鳴り響く。オルガがそちらに目を向けると、数人のヒットマンが車から降りて銃を構えていた。瞬時に何が起こるかを察したオルガはライドを抱え込み、自らの背中を盾にして庇う態勢に入った。

「ぐわっ！」

チャドに銃弾が当たり、それを皮切りに銃弾の嵐がオルガを襲った。

「団長?!何やってんだよ、団長!!」

「ぶろうっ!!」

数多の銃弾が背中を貫こうともライドを庇い続ける。オルガは懐にしまつてあつたミカから借りた銃を取り出し、ヒットマンの方へと構える。

「ヴアアアアアアアアアア！」

オルガは銃の引き金を引き、放たれた3発の銃弾の1発がヒットマンに当たり、車に乗り込んだヒットマン達はアクセルを蒸して急いで撤退をしていく。

「はあ……はあ……はあ……。なんだよ、結構当たんじゃねえか……」
「だ……団長……！あつ……ああ……！」

オルガの足元から夥しい量の血が流れ出す。過去に何度も見たことのある致命傷レベルの傷だ。道具や設備もないこの状況では、どうしようもない。

「なんて声出してやがるっ……ライドオ！」

「だって……だってえ……！」

「俺は……鉄華団団長……オルガ・イツカだぞ！こんくれえなんてこたあねえ！」

「そんな……俺なんかのために……！」

ライドは涙を溢れさせる。自身を庇ってしまったが為に起こった、オルガの姿に悲嘆の声をあげる。

「団員を守るのは俺の仕事だ……！」

「でも……」

「いいから行くぞ……！皆が待ってんだ……！それに……！」

オルガは歩き出す――。

進み続ける為に、皆に路を示す為に――。

(ミカ、やっと分かったんだ。俺たちにはたどりつく場所なんていらねえ。ただ進み続けるだけでいい。止まんねえかぎり、道は続く)

オルガの頭に映ったのはミカの――昔からの兄弟分であり、大切な相棒の姿だった。

『謝ったら許さない』

ああ――分かってる。

「俺は止まんねえからよ……！お前らが止まんねえかぎり……その先に俺はいるぞ！」

オルガは地面に倒れ伏した。しかし、オルガの手はその先、明日へと向きながら。血は意思を表すかのように指先へと伸び続ける。

「だからよ、止まるんじゃねえぞ……！」

最後に声を張り、最後の団長命令を響かせる。団員達が立ち止まらないように。

こうして、鉄華団団長、オルガ・イツカの人生は幕を閉じた――。

はずだった

第一話

どこかの部屋、そこにある椅子に私は座っている。

——怖い目にあつたみたいだね。

目の前には男性が立っており、朧げに見える。

——レイチエル。

レイチエル……レイチエル・ガードナー。それが私の名前。

——僕はダニー。君のカウンセリングの先生だよ。

気のせいだろうか。先ほどまでの男性とは、違う男性が立っている気がする。しかし、声は変わらない。

——何があつたのか、話してくれるかい？

私は——。

「んんっ……んん？」

オルガが眼が覚めるとそこには無機質な見知らぬ部屋。そして見知らぬプラチナブランド色の髪の少女が椅子に座りながら寝ていた。オルガは地面に寝ていたようだが、次第に頭が冴えていき、違和感に気づく。

(は？…どういふことだ？俺は確かに撃たれて死んだはずだ)

身体には傷も痛みもなく、血は流れていない。それに死んだ時よりも若返つてるような感覚がした。

何が起きたか、把握しようとしてるうちにどうやら少女の眼も覚めたようだ。

「おお、嬢ちゃん大丈夫か？」

「……………」

「よくわかんねえ」

オルガにも訳が分からず、死んだと思ったらこんな場所に放り出されていた。すぐにでも行動を起こすべきと考えたオルガだが、ライドやタカキと同年齢くらいの少女をこんなところには放っておけないのも確かだ。

「……青くて綺麗な月。でも、本物じゃないみたい」

窓から差し込む神秘的な光。少女の言葉にオルガもそちらに目を向ける。それは火星に住むオルガにとって、目にする機会が少ない月。尚且つ満月で青く輝いていた。

(月……月か。ミカ……)

自分が残してきてしまった相棒。その悔やみを思い出してしまい、少女がいるにも関わらず、葛藤の声をあげた。

「何やってんだ、ミカアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その叫びに少女は驚いた顔をする。だが、それも束の間。部屋のドアが勢いよく開き、入ってきた人影が一瞬でオルガに距離を詰めて胸倉を掴んだ。

ピギユ

「うるさいなあ、なに？オルガ？」

「は……う？ミカ、お前……」

そこにはここにはいるはずのない、ミカ——三日月・オーガスがいた。その結果、オルガの頭に思い浮かんだのはミカの死だった。

「まさか、ミカ……お前も」

「とりあえず謝りなよ。驚いてる」

「アツ、すみませんでした」

オルガは我を忘れて少女を脅かしてしまった。例え意味不明な状況下であっても、いや、こんな時だからこそ年上であるオルガが冷静でいなければいけない。

そこには通さなきゃいけないスジってもんがあるはずだ。

「いきなりで驚いたけど……平気」

「本当に悪かったな、嬢ちゃん。ところでミカ、お前はなにしてたんだ」

「2人より先に眼が覚めたから外の様子を見てた。あまり広くはなさ

「そうだよ」

ミカは持ち前の直感で今いる場所がそこまで広くないと思い、少し歩き回っていた。特になにか起こったわけでもないのに、オルガが叫んだ瞬間戻ってきたわけだが。

「そうか、ならさっさとこんな意味わかんねえ場所でちまうか」

「俺はオルガが決めたことならやるよ」

「私も早くお父さんとお母さんのところに帰らないと……」

こうしてオルガとミカと少女は行動を共にすることになった。現在いる部屋は特に調べることみなさそうなので、一つしかないドアを開け放つ。

外は廊下となっており、沢山の監視カメラがそこら中に張り付いている。道も柵で塞がっているとところがあるため実質一本道だ。

そして、この状況を見た少女は狼狽えてしまう。

「私は病院に来ていた……。でも、ここは私の知っている病院じゃない」

「は？嬢ちゃん、正気か？いや、俺らが言えたことでもねえな」

オルガの記憶にもこんな場所は来たことも見たこともない。そもそも病院なんて施設は、ここまで監視カメラが付いているものではなかった。

「うん、俺もこんな場所知らないし」

ミカが火星ヤシを摘みながら答える。ミカにも覚えがないみたいだ。

3人は壁際の方まで歩いて行き、壁に文字が書かれていることを発見する。

君は一体誰で、何者か

自身で確かめてみるべきである

本来の姿か、望む姿か

天使か、生贄か

己を知れば門は開かれる

……全くわかんねえ。何者か、なんて言われても俺は鉄華団団長、オルガ・イツカだ。それ以降のことはやっぱりよくわかんねえ。

「正直ピンときませんね」

オルガは思考を放棄した。元より考えることは得意じゃないオルガにとって、これは意味不明な文字列と変わらない。少女はどうやら考え込んでいるみたいだ。

「……俺が見たときはこんなのがなかった」

ミカは不思議そうな声を出しながら、そう言った。つまりはこの短時間で誰かがここに書いたということになる。

とりあえず色々調べてみないことには話が進まない。少女がすぐそばのドアに手を掛けて開いた。

——が、そこにいたのはオルガを殺したあの3人の黒服のヒットマンだった。

既に銃を構えており、あの時と同様に即座にオルガは少女を庇う態勢に入る。

「ミカア！」

その一言を発しただけでミカは瞬時にオルガの意図を理解して、廊下へと出て迎撃の準備をする。

しかし、ヒットマンの行動の方が圧倒的に早かった。

「ぶろうっ!!」

あの時の再現のようにオルガは銃弾を背中に受け続ける。それを少女が心配そうな表情でオルガを見つめた。しかし、オルガもやられっぱなしでいる気はない。

「ヴアアアアアアアアア!!」

銃弾を放ち、1人のヒットマンに直撃する。その後ろからミカが冷静に2発の銃弾を撃って、残りの2人を貫いた。

そして、撃たれたヒットマンは幻のように霧散する。

だが、オルガから流れ落ちる血は本物だった。

「あっ……」

「オルガ！」

なんて声を出してやがる……！俺は既にあの時に死んでいたはず

の人間だ……！気にすることじゃねえ……！

「嬢ちゃんを守んのは俺の仕事だ……！」

オルガの頭の中に音楽のようなものが鳴り響く。オルガの死を見送るかのように、鉄華団の進むべき道を象徴するかのような希望の華の歌が。

「俺は止まんねえからよ……！お前らが止まんねえかぎり……その先に俺はいるぞ！」

オルガはせめてもの想いとして、ミカと少女にあの時と同じように行くべき路を指し示した。

「だからよ、止まるんじゃねえぞ……！」

——オルガは2度目の死を迎えた。

「……は？」

(なんで生きてんだ……?)

オルガは確かに絶命した。意識も途切れた。なのに数秒後には怪我もなく、そこに生きていた。その証拠にミカも少女も理解が追いついていない顔をしている。

「……？まあ、これは死んでいいオルガだから」

「勘弁してくれよ、ミカ……」

「……？」

変な事態は起きたが、このことも含めて詳しく調べる必要がある。オルガの身になが起きたのか、それも解決するべきだとオルガとミカは判断した。

「とりあえず、景気良く前を向こうじゃねえか！」

「……うん」

オルガは少女を庇って死んだことを気にしないように元氣付けた。この年頃の普通の少女が、絶命するところや死体なんて見る機会も滅多にないだろうということも含めて、大きい声を張ってフォローを入れる。

改めて部屋の中を見渡す。当然監視カメラがあり、電源のついてい

ないパソコンが置かれていた。電源ボタンを押しても作動しない。前の壁一面にはガラス張りがされており、中央だけ鏡になっていた。

そこには少し焦りを浮かべている少女に、オルガやミカの姿が映り込んでいた。

「……いつもの私」

「いいんじゃないの」

客観的に見ても目の前に映る少女は可憐や綺麗と言った類であり、更に年相応な小柄で華奢な姿。将来はクーデリアみたいな美人になるのではないかと思い、オルガは称賛の言葉を送った。

鏡を見ていると背後でパソコンが起動した音が聞こえた。そちらに向かうと『情報画面を開いています』と流れた後に『質問にお答えください』と喋り出した。

——あなたの名前は？

その質問に少女は一瞬戸惑い、辿々しく答える。

「……レイ、レイチェル・ガ「俺は鉄華団団長、オルガ・イツカだぞ……！フヘッ」……」

少女、もといレイチェル・ガードナーことレイの声を遮り、迫真の声とせせら笑いでオルガは質問に答えた。

「ちよつといい？」

「……？」

ミカはレイを呼び寄せて、何やら話し込みながら、手振り身振りで説明をする。そして戻ってきたレイがオルガに対して——。

「ぶっ……っか……っ！」

——渾身の右フックを炸裂した。オルガは倒れ伏し、なぜか血だらけになりながら先ほどの状態になっていた。

オルガの脳内には先ほどの音楽が鳴りながら、殴られたことよりも、自分の体への違和感の疑問を複数浮かべていた。

(いつの間に俺の体はこんな柔になったんだよ……？)

いくらなんでも、少女のパンチを喰らったところで倒れるほど軟弱でもあらず、あまつさえ殴られて血だらけになるとはどういうことな

のか。

そして、勝手に口が動くように言葉を発していた。

「だからよ、止まるんじゃねえぞ……！」

そのままオルガは息絶えて、数秒後には何の異常もない元の体に戻っている。異常ではないが異常ここに極まれりと言ったところか。

「わけわかんねえ。どうなっちまったんだよ、俺の体は……」

「それでも進み続けるしかないよ、オルガ」

「……そうだな。どうせ後戻りはできねえんだ！」

オルガは気合いを入れ直す。もう一回パソコンの方に向き直して、質問の続きを待つ。

「そういや、嬢ちゃんの名前はレイチエル……でいいんだな？」

「……うん。レイ、でいいよ」

「改めて俺の名前はオルガ・イツカ、鉄華団の団長だ。こっちは……」

「まだ答えてなかった。三日月・オーガス」

レイが鉄華団という言葉を不思議に思ったが、自己紹介も兼ねたミカの声と共にパソコンの質問が更新され、思考を遮られた。

——年齢は？

「……13」

「19……「オルガ、違う」は？」

オルガの声がミカに遮られる。違うと言われたが、何が違うのか。

オルガは19歳であり、その歳が享年となった。

「よく自分の身体をみて」

オルガは自分の身体をしてみる。よく見れば死んだ時より遙か前——というよりも鉄華団を立ち上げた当初の姿まで戻っている。

最初に起きた時に感じた違和感はそれなのだろう。

「つてことは17か」

「うん。俺は15」

——なぜ、ここにいますか？

早々と質問が更新されていく。こちらのペースなど考えてはいないみたいだ。

「病院に来ていて……気がついたらここに……」

「さっぱりわかんねえ」

「分かるわけないじゃん」

——なぜ？

「……？」

「わかんねえつつてんだろ！」

「あんた、何言ってるの？」

——なぜ？

——なぜ？

答える間もないほど連呼をされ、レイは怖がり、オルガとミカは次第にイラついてきた。

「おまえ状況分かってんのか？」

「消えろよ……お前」

——なぜ病院に？

次に来た言葉で体を少し震えさせながら、レイは思考の海に沈んでいく。レイの様子にオルガは気づき、鉄華団に所属する子供達のように頭を撫でながら声をかける。

「大丈夫だ、すぐ側に俺達がいる。俺達は嬢ちゃん……レイの味方だ」
思考に沈みながらもその言葉はレイに届き、落ち着きを取り戻していく。次第に断片的にだが、レイの脳裏に記憶が蘇ってくる。

「……人が死ぬところ、殺されるところをみたから。……目の前で」

「俺じゃねえか……」

「違う。……だから、カウンセリングに連れてこられた」

レイの頭には眼鏡をかけた男性のような、金髪の男性のような姿がボヤけて思い出された。

——今後どうしたいですか？

「……早くここから出たい。お父さんとお母さんに会いたい……」

「何、心配いらねえさ。団長しての俺の仕事だ」

その言葉にミカは口角を上げる。どんな状況だろうと、どんな場所であろうと、オルガ自身がどうなっていたとしても、オルガの信念は決して変わらない。

「お前を……俺が連れてってやるよー！」

「オルガならそう言うと思つてた」

——記入終了

終了の言葉と共にピツと音が聞こえ、扉の開く音が聞こえた。廊下にあつた塞がれた柵の扉が開いたのだろう。

部屋を出て開いた扉の先に向かうとエレベーターがあつた。しかし昇りボタンしかなく、今いる場所はB7となつていた。

3人がエレベーターに乗り込み、扉が閉まると突如鐘の音が鳴り、放送が響き渡つた。

——最下層の彼女は生贄となりました。みなさま、各フロアにてお準備を。

「今の放送……何……？」

「どうやら、俺たちの命をまき餌ぐらいにしか思つてねえみたいだな」
オルガは今の放送に眉を潜める。生贄だのなんだのつて話はこの幼い少女にする話ではない。相手方は相当腐りきつてるようだ。

「一度決めたことなら、通さなきやいけねえスジがある。レイを連れて絶対にここから出てやるよ！」

オルガの宣言と同時にエレベーターは鈍い音を立ててB6階へと停止した——。

第二話

B6階に着いたエレベーターの扉が開く。目の前に広がる光景は荒れ果てた駐車場のような場所であらゆる所から異臭が漂ってくる。大量の積まれたゴミには虫が集っており、先ほどのフロアとは全然違う、不快になる場所だ。

——ここから先はプレイエリアです。

そんな放送が流れ、レイは不安そうな表情で呟く。

「プレイエリア……?」

「えっ? いや、俺は別に……」

レイの言葉にオルガは頬を染めて答える。オルガにはそう言った経験が皆無なので別の方向に言葉を解釈してしまった。その結果は容易に想像できるだろう。

「……何、想像してるの」

先ほどの不安そうな表情が引つ込んだレイの洗練された右フックがオルガの頬に叩き込まれる。血だらけになったオルガは倒れて行き、再度、希望の華を咲かした。

「だからよ、セクハラするんじゃないぞ……」

「ダメだよオルガ」

レイには冷ややかな目線をされ、ミカには諫められた。そして、3度目の死を迎えたオルガはこの現象に若干の慣れを感じつつ起き上がった。

「ここ、本当に建物の中なの……?」

「俺にいい考えがある。ただ、進み続けるだけでいい」

そう言つてオルガは走り出す。オルガ自身が先に行けば危険なことがあつても回避が(死ぬことで)できるだろう。レイも心の準備をし、オルガを追いかけるように走り出した。

「ヴァアアアアアアアア!!」

道の角より少し行つた先でオルガの断末魔があがつた。警戒をしながらもオルガの行つた方へ向かつていく。

目の前に広がる光景は、やはりレイには知らない場所の道だった。そこには血の上で倒れ伏したオルガがいるが、その血はオルガのものではなかった。

「オルガ、大丈夫……？それに、血……？本物……？」

「さてと……。飛んできた虫に驚いただけだからよ……」

オルガは起き上がり、目頭を押さえ、溜息をつく。オルガが全力疾走してる最中、目の前に黒光りしたGが飛んできたという事態が起こった。それに驚いた拳句にシヨック死した。いくらなんでもちよつとしたことで死ぬのは勘弁したい。

「血は本物……それに時間が経ってる」

後から追いついてきたミカがそう口にした。ミカが手にかけて人数は決して少なくない。その経験からミカはこれが本物であることに気づいた。

その言葉にまた表情がぎこちなくなったレイの耳に小さな鳥の囁きが聞こえてきた。小鳥は高い隙間に潜り込んでおり、そこで鳴き声をあげていた。

「悪いけど急いでん d」小鳥が逃げちやうからちよつと黙ってて「ぶつ……！」

またもやオルガにレイの右手が飛ぶ。これまでと違い倒れない変化が起きたので、レイが手加減したのだろうか。オルガは頭でそう考えながら謝罪することにした。

「すみませんでした」

「こつちへおいで」

オルガの謝罪を耳に入れつつ、レイがそう言いながら手招きするものの、小鳥は壁の中から降りてこない。よく見ると少し弱ってるようにも見えるので、お腹が空いているのかもしれない。

「お腹空いているのかな……？」

レイはポシエットの中を軽く見てみるものの、食べ物類は見当たらない。あまり歩き回りたいくはないが、食べ物を探しに行こうとする、ミカから声がかかる。

「火星ヤシならあるけど」

「火星ヤシ……う？」

火星ヤシなんて物は聞いたことないが、何処かのお菓子だろうか。ミカが袋から何個か取り出して渡してくれたのに感謝しつつ、足元に置いてみる。すると壁から降りてきて小鳥は火星ヤシを口にしたら嬉しそうな鳴き声をあげながら突いている。

それを微笑ましそうに見ていると、レイは小鳥が羽に怪我をしていることに気付いた。

レイはポシエットから包帯を取り出して、処置を施していく。

「これで大丈夫」

「随分と手慣れてるな」

「……うん」

レイ自身はなぜ手慣れているのか分からない。けれど脳内に血が飛び散るような光景が、掠れて見える気がする。それがなんなのかも分からない。

喋っていて気づかなかったが、小鳥が震えている。その様子は見るからに不自然なほど震えていて、レイ達の目の前から逃げ出す。

「……逃げちゃダメだよ」

そんな声も届かず、木の板が沢山打ちつけられている場所の前まで進んでいく。怖がらせないようにレイは優しく声をかけながら、手を伸ばす。

「一緒にここから出よう……ね？」

——刹那、板が弾け飛んで、目の前の小鳥が真つ二つに叩き割られる。それにオルガが巻き込まれて、いつものように倒れた。

「ヒヤッーハハハハハハハハハハハ！」

「今、お前は、満ちた顔をしやがったな。でも今は絶望だ……！」

目の前に現れたのは赤いズボンに、模様が特徴的な黒いパーカーのフードを被っている。そして顔や肌には包帯が巻かれており、大きな鎌を携え、狂気的な高笑いをする男だった。

「三秒数えてやる。だからさあ、逃げてみるよ？そしてもっと見せろ、絶望の顔を！」

復活したオルガは目線をミカに送る。ミカが行動に移そうとした

時、足元でチャリンと金属音のようなものがした。どこから出てきたかは分からないが、それをすぐに拾おうとする。

「さああああああああん……」

カウントダウンが始まったと同時にミカがそれを拾い、レイに投げ渡す。それをなんとかキャッチしたレイはオルガとミカの方を見る。

「それを持って逃げて」

「早く逃げろ！」

「にiiiiiiiiiiiiiiii……」

レイは2人に言われた通りに走り出す。ミカとオルガは拳銃を取り出して、射撃態勢に入った。

「iiiiiiiiiiiiiiiiち……」

「ミカア!!」

パンパンパン

「ヴアアアアアアアア!!」

男のカウントダウンが1秒になった瞬間、オルガの合図と共に2人で発砲する。しかし普通なら当たるはずの弾丸は、男が回避することによって当たらなかった。更に鎌で銃弾をはじきながら徐々にオルガの方へ近づいてくる。

「ヒヤハハハハハハハハハ！アーヒヤツハハハハハハ！」

「オルガ！」

「うつつつ!!」

オルガの目の前にまで来た男は鎌を振りかぶり、オルガに突き刺した。ここに来てから、レイのパンチで致命傷に至ってるオルガに、鎌の一撃を耐えられるはずがなく絶命する。

オルガが殺されたものの、ミカが銃を撃ち続けながら足止めをする。

一方、逃げ出したレイは渡された物が、エレベーター通路管理室のカギだと分かった。どこにあるかは分からないから、手当たり次第探すしかない。

2個ほど部屋を走り抜けた先に、床下にそれらしき場所があったのでカギを差し込むとカチャリと開く。急いで床下の通路に潜り込んで、壁にあるスイッチをONにした。

「……！」

上で物音がする。どうやら先程の男が追ってきたようだ。息を殺して物音が過ぎ去るまで待つ。数分が長く感じるぐらいの時間が経ち、ようやく男は部屋を出て行ったようだ。

しかし、男が追ってきたということはオルガもミカも足止めが長く続かなかつた、ということになる。レイは二人の無事を祈りながら、小鳥が殺されたところまで戻った。戻った場所にはオルガとミカの姿があり、どちらも特に怪我はしてない様子だ。

「エレベーターの電源を入れてきた。これで逃げられるはず……！」

「ありがとう、それにごめん。今回はあんまり役に立てなかった。オルガも死なせちゃったし……！」

「気にすんな、お前はよくやってくれたさ。レイもありがとな」

「……うん」

レイにとつて、これまでずっと守ってきてくれた二人の役に立てたのは嬉しいことだった。けれどその喜びは置いといて、やることをやってしまわないといけない。

小鳥の目の前に座り込んだレイは段々と妙な感情に支配されていった。

「違う………こんなのじゃなかった………」

「はっ！」

レイの瞳は光を消していき、蒼色に染まっていく。そんな可笑しい様子のレイにオルガは素っ頓狂な声を上げ、ミカは黙って見守っていた。

「こんな可哀想じゃない……。私の小鳥に直してあげる………」

流れるようにポシエットから針と糸を取り出し、真つ二つにされた小鳥を元の形に縫い合わせていく。オルガやミカから見てもそれは異常な光景だったが、嬉しそうに微笑みながら作業をするレイに口を挟むことはできなかつた。

「……まだダメ」

そう言つて近くにあつたシャベルを手に取り、オルガの頭に叩きつける。理解も出来ず、オルガは希望の華を咲かせた。

「これでもう大丈夫」

「大丈夫じゃねえからよ……」

ミカはジツとレイの方を見つめながら、火星ヤシを口の中に放り込む。オルガはすぐに蘇生して、エレベーターがある方に行くことを促す。

他に通つてない道はひとつだけしかなかったので、そちらの方へと向かった。

「この先にエレベーターがあるのかな……?」

「後戻りはできねえんだ。進むしかねえ」

だが、あと少しだという3人に魔の手が迫っていた。

「ヒヤッーハハハハハハハハハハハハ！」

「……!」

「これは……!?!」

「やあーつと見つけたぜえ……」

先程の男が既にすぐ後ろにまで迫っていた。笑みを浮かべながら臨戦態勢に入っている。

「待ってくれ!」

「今度は1秒も、待ってやらねえよ!」

「待てよ……待てって言うてんだろ!」

男はレイの方に一直線に突撃して鎌を振り下ろすが、その間にオルガが挟まることでレイを庇う。

「うつつつ!」

再び鎌の一撃を受けたオルガは血を流す。一瞬で絶命することをなんとか避けて、レイに声をかける。

「守んのは俺の仕事だ……俺は止まんねえからよ……!お前らが止まんねえかぎり……その先に俺はいるぞ!」

だが、その声も目を見開いて恐怖しているレイには届かなかつた。男はレイに近づいていきレイを殺そうとするが、ミカが発砲し、それ

ルガの方へ近づいていく。オルガはレイを逃がせたことにより強気
の態度を取った。

「は？お前状況分かってんのか？俺は落とし前を付けに来た」

そしてオルガはミカに向かって指示を出す。

「頼むぜミカア！」

しかしミカはエレベーターの方を見ながら、オルガの指示を拒否し
た。

「やだ」

オルガも負けじとミカに頼み込む。ここで断られてしまえば、後の
結末が悲惨なことは避けられないだろう。

「頼んだぜえ、ミカア！」

次は返事すらせず黙々と火星ヤシを食べ始めた。エレベーター
の方から視線を外さずに。

「何やってんだ、ミカアアアアアアアアアアアアア!!」

その2人の様子を見て、男はオルガに憐みの視線を送りながら鎌を
振りかぶる。

「すみませんでしと」

オルガが言い切る前に、鎌で切られるのではなく、ぶん殴られてオ
ルガは死亡した。

「だからよ、止まるんじゃないぞ……」

「……」

ミカはオルガが死亡しても特に気にせずエレベーターを見つめ
——否、レイを乗せたエレベーターが向かった上階の方を凝視して

いた。

(なんだろこの感じ——……チョコの人?)

。遂に来たんだね……僕のレイチエル——いや、私のバエル——